



# やさしい声

3年前、5歳の息子が急性リンパ性白血病と診断されました。10カ月間の入院。状況が飲み込めないまま私も一緒に入院することになりました。

入院して初めての晩、息子は麻酔でぐったりと寝ていました。しかし、私は病名、治療の説明のいろいろが頭の中を渦巻いて眠るどころではありませんでした。暗い部屋の中、付き添い用ベッドの上にぼうぜんと座っているとカーテン越しに「ママがいなくてさみしい……」と泣きそうな子どもの声がしました。隣の男の子がナースコールを押したのです。「ママは用事で泊まれない」と言っていたのを思い出しました。すると看護師さんがすぐにやって来て彼に言いました。

「どうしたの？ 眠れないのかな？」  
「うん。ママがいないから……」  
「大丈夫だよ。あしたすぐ来てくれるからね」

「でも怖い。寝られないよう」  
すると彼女はこう言いました。  
「大丈夫だよ。眠れるまで手をつないでいるからね」

ささやくような優しい声でした。もちろん私に向けられたものではないですが、その優しい声を聞いているだけで私もほっとしました。そしてようやく涙が出てきました。病名宣告以降、ショックで涙も出なかったのです。

彼は安心して眠りについたのでしよう。彼女は私のところに来て「ごめんなさい。起こしちゃいました？」と気遣ってくれました。起こ

〈東京都〉谷口 治子 49歳  
たにぐち はるこ

しちゃったどころか、混乱していた私まで安心しちゃいました、とお礼を言いたいくらいでした。  
今でも思い出すとちょっと泣いてしまいそうになります。

